

# 第16号 華山会報

平成18年4月11日  
財団法人華山会

## 渡邊華山とキリスト教

金城学院大学名誉教授 眞山光彌



昭和二十三年四月、賀川豊彦は豊橋で「渡邊華山は何故捕らわれたか知っているか。あれはキリスト伝を翻訳したからだよ。その先覚者を出した田原に君達も行って伝道してくれ給え。」と言ったという。そう伝えしたのは豊橋中部協会牧師の岡本繁男だった。筆者はこの言葉を三十数年前に知った。後日、逮捕の理由は賀川の誤解と分かったが、キリスト伝の翻訳は本当だった。ただ華山は、常日頃、耶穌教は邪教ではないのではないかと疑問を抱いていたという。

華山が高野長英と小関三英の助けをかりて、蘭書から知りえた世界知識は、当時の最新情報だった。その情報の中で、華山が理解した耶穌教は、次のようである。

まず華山は、耶穌教を世界の五大宗教の一つと考え、その人倫の道「大道」は、儒教の「大道」と同じで、聖職者や国王は徳のある人である、と理解していた。

第二に彼は、ヨーロッパの耶穌教に、カトリック、ギリック（ギリシア正教、ロシア正教）、プロテスタントの三派の協会があることも知っていた。

第三に、「神学」は耶穌教の用語であるので、華山は「教学」と訳したが、彼によると、学問には「教学、法学、医学、物理ノ学」の四つの学があり、芸術（技術）はこの四つの学を補い、とくに「物理ノ学」は、教学（神学）に密接に関係し、西洋文明の本質と理解していた。「物理ノ学」はもとも神が創造された自然を研究する学問だったからである。ただ彼は、キリスト教の贖罪思想を知らなかった。

華山は、阿片戦争（一八四〇～四二）の前夜、イギリスとロシアの動向に誰よりも早く気づき、西欧のような学校制度、つまり「養才造士」（教育）制度の確立と、海防充実の緊急性のために「物理ノ学」の必要性を説き、「井蛙管見」や多くの比喩を羅列して鎖国や幕政を批判していた。そして「蛮社の獄」で逮捕された華山は、幕政批判の罪で在所監居の判決を受け（一八三九）、二年後、自刃した。

また華山は、小関三英に『吉利支耆傳』を訳読させていたが、三英は華山逮捕の報に接したとき、耶穌教の国禁を犯したためと誤解し、これを焼却、即夜自害した。

華山は、耶穌教は邪教ではなく、日本の蝦夷地と同じ緯度にある寒冷なヨーロッパ諸国を富強にした「養才造士」（教育）に欠くことのできない宗教として理解していたのである。歴史は変えられないが、もし小関三英訳読・華山訳記の『吉利支耆傳』（一八三九）が現存していたら、ギョウツラフ訳の『約翰福音之傳』『約翰上中下書』（一八三七）とともに、日本聖書翻訳史に大きな影響を与えたであろう。



華山会館

# 華山の名前に想う

田原市教育委員長  
菰田俊英

現在、私の住んでいる吉胡地区は童浦小学校へ通学しておりますが、昭和六十一年までは田原中部小学校へ通っていました。

旧田原町吉胡で生まれた私は、約一・五キロの田んぼ道を近所の友達五、六人とメダカやザリガニ、トンボや蝶などと戯れながら田原中部小学校に通学していました。

遊びや運動に明け暮れて、まったくと言つぐらい勉強の思ひ出のない六年間ではありましたが、唯一、この会報にもよく登場する、学芸会での華山劇「板橋の別れ」だけは強く私の心に残っています。

私は出演者でも合唱隊でもありませんでしたが、劇の中で虎之助が弟熊次郎に「そんな女々しいことを言うならもう兄でも弟でもない。」とか「武士の子が道で泣くとは、なんです。」と言ったセリフや「男と生

まれし我れなれば必ず身を立て、名をおこし……。」と言った虎之助の独唱の歌詞を今もはつきりと思い出すことができます。そしてこの劇を通して虎之助こそが後の偉人華山先生であることを知ることができて、その時これを演じた友達がとてものつかしく、また偉人のように見えま

した。成章高校に通学するようになった私は、相変わらず勉強にはあまり縁がなく、野球部の練習に明け暮れていました。三年生になり夏の大会で部活動も終わり、気が抜けていた私達の唯一の楽しみは昼休みでした。しかし教室で食べる弁当の味気なさに、誰れ彼れとなく自然と弁当を持って池ノ原に足が向かうようになりました。木陰や石畳の上やまた時には幽居に入り囲炉裏を囲み、持ち合わせの日の丸弁当に缶詰や佃煮を出し合って食べている時に自然と話題は華山先生のことになりました。「ここが華山先生が家族といっしょに住まわれた家だ。」「こっちの離れ

が自刃した所だ。」「いや自刃されたのは外の庭だ。」など皆さんで話しているうちに何となく華山先生について勉強している様な気持ちになり、先生に親しみを感じるようになりました。

大学を卒業して高校の教師になりました。恥ずかしいことに華山先生について殆んど勉強していなかった私ですが、学校や旅先や何等かの機会に田原市を紹介する時はいつも誇らしげに堂々と華山先生のお名前を口にさせて頂いております。

最近、役職から時々博物館に行く機会があります。おくれればながら、これから華山先生についてももっともつと勉強したいと思っております。



現在の池ノ原幽居跡

P	P	P	P	P	P	P	P	P	P	P	題字「華山会報」華山会理事	目次
田原市博物館	財団法人華山会 田原市博物館からのご案内	田原市博物館からのご案内	九州国立博物館	墓参と北斎展	善雄寺・谷中墓所の鑑賞(8)	渡辺華山の「自律狂歌草稿」鑑賞(8)	「山本文承筆季路像」	田原市博物館所蔵品から「駄吉小記」・「駄吉或問」	「乳大図」	画家渡辺華山の心象	田原市教育委員長	小澤耕一
											眞山光彌	
											菰田俊英	

# 画家渡辺華山の心象

乳犬図 江戸時代後期

紙本墨画淡彩

縦一三三・二cm 横五六・八cm

田原市博物館蔵

犬は縄文時代から人の友でし、旺盛な繁殖力から安産と子育てのお守りともなっていました。この「渡辺華山の心象」では、生物画として「鳥」を画題としたものや「猛虎図」（華山会報第12号掲載）などを取り上げました。華山は十代から一七三一年に長崎に來舶した沈南蘋作品を模写するなど鹿・馬・虎などを多く描いています。華山が生きた江戸時代でも、「生類憐之令」を出した五代將軍綱吉の例をあげるまでもなく、犬を飼うことは決して珍しいことではありませんでした。華山よりやや早い時期の作家で京都を中心に活躍した円山応挙や伊藤若冲も多く描いています。華山は、二十六

歳の時に描いた「一掃百態図」（重要文化財・田原市蔵・華山会報第8号掲載）にも蒲鉾売りの行商人が持つカゴに鼻先を突っ込んでいる犬や江戸市中を行き交う人の間を群れで歩く犬、寝そべっている犬を描いています。食糧が豊富な都市では野犬も多く、ごみ処理の役割も果たしていたようです。犬は十二支にも数えられ、大名の中には中国や西洋から渡来する犬を飼育するものもあり、絵画にもそれらの珍しい種類が描かれます。また、華山が多く残した手控画冊の中にも能狂言に使用したと考えられる犬の面のスケッチ（天保三年「客坐掌記」重要美術品・田原市蔵・華山会報第9号掲載）や中国から愛玩用として輸入され、室内犬としてよく登場する狎（な）（天保八年

「客坐掌記」重要美術品・個人蔵）が見られます。華山が求めた写実を表現するのにも身近な存在である犬は格好の題材となったのでしょう。また、現在所在不明となってしまうが、華山が田原に蟄居していた当時の幽居を描いた「幽居図巻」（昭和十六年『渡辺華山先生錦心図譜』）にも家の前に犬が描かれています。華山もぬくもりのある存在として飼っていた可能性もあります。最晩年と考えられる「乳狗図」（黒川古文化研究所蔵）ではポインターに似た母子の犬が描かれています。今回、紹介する「乳犬図」は「乳狗図」と同様に母子二匹の犬を題材にしています。ほとんどが墨を基調とした没骨法で描かれ、墨の濃淡で母犬の毛描きが表現されています。



わずかに子犬の目と口のみに着色がなされていきます。母犬は、首をやや左にひねって、子犬を守り、いとおむむように腹

の乳を子に向けているところです。子犬の口の中は代赭で塗られることにより、口をあけている様子がわかり、まさに母の乳をもらう瞬間を描いています。画面右上から左斜め下に母犬が描かれ、左上には何も描かれていません。母犬のヒゲの鋭い線や下半身から尾にかけては素早い筆さばきが感じられます。一見荒々しく感じられますが、その筆には勢いが立体感に変わる瞬間を見せられるようです。

この作品は、「老狗養雛狗図」として『國華一三七号』に、明治時代、埼玉県議会初代議長となり、荒川の突堤を私費で築いた竹井家の所蔵品として紹介され、熊谷で本陣を営んでいた竹井家の先代が曲亭馬琴の書いた読本『南総里見八犬伝』に登場する里見義實の愛犬、八房を画題として依頼した、とのエピソードを伝えていきます。東京美術青年会編『渡辺華山先生錦心図譜』（昭和十六年発行）第二七〇図にも紹介されています。

田原市博物館学芸員

鈴木利昌



「駄舌小記」・「駄舌或問」 ⑤

研究会長 渡辺 巨祥

駄舌或問・続 (最終回)

〔底本は蓬左文庫〕

一 或問 我邦ニテ八年一両度モアルヘシ解体朝ヨリタニ及フ貴国モ亦然ルヤ

答曰 我邦ニテ八日又八十二日モ掛リ候精細スルニ八眼精計リモ十日許リカカリ可申候多クハ全体ヲ蒸テ用ユ貴国ノ一日ニセルハ如何ニヤ

一 或問 ソノ始テ従事スル解体ハイカヨウ手数力カリ候」ニ候ヤ定メテ何方ヨリ刀ヲ用ヒ何処ニ終ルト云」可有之哉我邦ノ如キハ大率朝ヨリ始マリタニ及フ貴国モ又然リヤ

答曰 室中ニ全骨一部ヲオキ神經動靜脈等各大サ人ノ如キモノ數幅ヲカケ身中ノ一部ツツソレニ合ハセテ法ノ如ク次第ニ解剖イタシ候間大抵十日許力リ候

一 ある人問う、我が国では、年二、三回行う程度である。朝から夕方まで一日中行われる。貴国も亦そつであらうか。

答えていう、我が国では、解剖に要する日数は、十日から十一、二日も掛けて行われる。精密に行うには、目の玉だけでも十日ばかりかかる。多くの場合、死体を蒸して行う。貴国では、一日で解剖をすませるといふが、どのようにするのか。

一 ある人問う、はじめて解剖を行う場合、ずいぶん手数がかかるとあるが、どうよつに、どこからメスを入れ、どこで終わるといふ規則があると思つがどうであらうか。我が国などでは、おおむね朝から始まり、夕方に及ぶが貴国もまたそつであらうか。

答えていう、室中に人骨を組み立てたものを一部おき、神経・動脈、静脈等おのの血管を実物大に描いた掛け図を数幅掛けておいて、身体内の一部つづをそれに合わせて、一定の規則にしたがいつづつきと解剖を行い、おおよそ十日間で完了する。

一 或問 「コンスビユルク」ハイカナル人ニヤ

答曰 能存不申候近來「ヒスコッフ」(名医ノ名)ト云アリ來年八爪哇へ参リ申候今時独逸ノ医人「ハーネマン」ト云者西洋第一也其療法病ニ激スル」ナク「ナチユール」ニ從ヒ譬ハ火ヲ救フニ火ヲ以テシ水ヲ救フニ水ヲ以テスルカ如シ

一 ある人問う、「コンスビユルク」(コンスプリユク)という人はどのような人なのか。

答えていう、残念ながらわからない。近頃では、「ヒスコッフ」といふ名医がいるということである。来年は、ジャワへ渡来するということである。

今日では、ドイツの医者「ハーネマン」といふ人が西洋での第一人者であるといわれている。その治療法は、病に逆らうことなく、自然に従い、火を救うに火をもってし、水を救うに水をもってするが如くである。

古來ノ法ヲ一変セリ年八十八歳ニ至リ窩々斯旬礼幾ノ免許ヲ受專其説ヲ広ムルニ諸國ノ名哲皆信從セサルハナシ此ヲ以テ仏郎察大貌利太泥亜及我國ノ医人ト會議シテ終ニ「ハーネマン」カ法ニ改ム歐邏巴全洲ニ及フヘケレハ終ニ八全地球中変スヘシカカル名医古來希ナル」ニ候

古來の治療法が一変した。八十八歳の時、窩々斯旬礼幾(オートテンレイキ)(ドイツ帝国ノ名)の政府の許可を得て、専らこの説を広め、諸國の名医でかれに信從しないものはないほどになった。そのために、フランス、大ブリタニア及び我が國の医者達が會議を開き、ついに「ハーネマン」の治療法を公認することになった。やがてヨーロッパ全州に及ぶであらうから、終には世界中の治療法が一変するであらう。このような名医は古來まれだといえる。

一 或問 「ハーネマン」ノ療法水ヲ以テ水ヲ救ヒ火ヲ以テ火ヲ救フトハ如何様ノ義ニ候ヤ

答曰 コレハ大医ニモ容易ニ會得ナリカタキ」ニテ最初八所々ニ爭論有之候共追々

ノ効驗ノ多キニ信服シ今ハ大率ソノ發明ニ從ヒ申候其子細ハ從來ノ療法ハ病ヲ敵國ノ様ニ心得候テ兵ヲ以テ之ヲ防キ又ハ病ヲ火ノ如ク心得候テ水ヲ以テ之ヲ消シ候様ニノミ苦心イタシ候ヘトモ病ハ人身ノ生活ノ變ニテ人身ノ外ニ病ノアルニハ無之候間ソレヲ人身ヨリ全ク取ハツシ候ハ出来カタク勢ナルヲ以テ其生処ニ注目シ先人身自然良能力何コトニ其變ヲ生シ候ヤ

一 ある人問フ、「ハーネマン」の治療法が、水をもって水を救い、火をもって火を救つていふことであるが、どういふことなのであつかうか。

答えていふ、これは学識ある医者にも容易に理解できがたいことなので、はじめはあちこちで論争があつたが、しだいに治療に効果が多いことがわかつて、これに信服し、今では多くの医者がその新説に従つようになつた。その子細は、從來の治療法は、病を敵國のように心得て、兵をもってこれを防ぎ、あるいは病を火に見立てて、水をもってこれを消すつとのみ苦心したが、病は身体の生活による変化によるものであつて、身体を離れて病があるわけではないので、病を身体から全く取り除くことはできないのである。そこで病気の生じる処（生命力の異変）に注目し、まず何故に身体に変化が生じたのかを考えることである。

其人ノ天稟若ハ居処損養ヨロシカラサル因リテ生シ候ヤ又其變ヲ生シ候ユヘニ身内一部ニ多少ノ災ヲ免カレ候義モ有之ヤ又ハ自然良能所欲ヲ主トスル所ノ方法トシ猶大地ヨリ將來スル許多ノ病ヲ藥若ハ他ノ方法ニ因テ調護シ又自然ニ因リテ加ハル所ノ命終ノ基ト申候ヘキ所ヲ避レシメ候」ニテトリツマミ候ヘハタタ脳神経ヲ強壯ニスル治法ニ御座候

その人の素質によるものか、もしくは環境や食生活が不適当なためにあるのか、またはその異変を生じた結果、かえつて身体の一部に多少の災いを免れることができただのか、または生命力そのものの力が弱く、災いを防ぐことができなかつたのか、その自然の良能の欲する所の方法として、外部から来るあまたの病因を、薬、もしくは他の方法によつて抑制し、又自然によつて加わる死の原因となるべきものを避けるようにすることであつて、かいつまんでいへば、もつぱら脳神経を強壯にする治療法である。

一 或問 近來發明ノ燐ト申候ハ如何様ノ奇能有物ニ候ヤ  
答曰 此一条淨写別ニアリ日本志ノ草稿ト共ニ二冊ニナリ居タリ  
一 或問 「マクネチユス」ト云物追々發明アリヤ今時療養ニモセル由如何

一 ある人問フ、近來発見された燐というものは、どのような機能をもつものであるうか。

答えていふ、この一條の答えは別に淨写されて、日本志の草稿ともに一冊になつている。  
一 ある人問フ、「マクネチユス」（磁石）という物の研究がおいおい進み、現在治療に用いられているといふことであるがどうか。

答曰 「マクネチユス」元來法家ニ用候具ニテ神奇不可思議ナル器ニシテ人ヲ誤キ」多キヲ以テ諸國濫用ヲ禁申候今ヲ去ル」三十年前大親利太泥亞ノ医人「メスメリス」（名人）ト呼ル者療養ノ為ニ奇機ヲ製造シ國王ノ免許ヲ受テ病人ニ施シ多ク瘳ヲ起シタルヲ以テ今ハ往々此專門ニ療治スル者アリ此器ヲ名テ「メスメリスチユス」ト申候サレト其器偏功アリテ大医ハ更ニ用ル」ナケレドモ凡庸ノ人ハソノ怪ヲ愛シ療ヲ乞フ者多クアリ

答えていふ、「マクネチユス」は元來、宗教家が用いた道具で、神秘で、不可思議な作用をする器であり、人を誤ることが多いので諸國ともに乱用を禁じている。しかるに今から三十年前、大ブリタニアの医人「メスメリス」といふ者が、治療用として磁石を利用して不思議な器械をつくり、國王の許可を受けて病人に施し、多くの病人を治療したので、今日では、往々にしてこの療法を専門にする者がある。この治療器械を「メスメリスチユス」（磁気桶）と呼ぶ。しかし、その効果は偏つているので、学識ある医者は相手にしないが、民衆の中には、その奇妙な効果に期待して治療を乞ふ者もすくなくない。

一 或問 貴国ニモ英出ノ者有之哉

答曰 「ベルグステイン」ト申者有之候我「アムステルダム」ノ酒肆ノ小厮ナリシカ生質不凡ナルヲ以テ学師某切ニ乞求メテ教育セシニ天文地理ノ学ニ上達致シ希代ノ碩学者トハナレリ今年二十二歳「アカデミー」(大学校)ノ学頭第一ノ官位ヲ受ケ門弟三千八百人ニ及ヘリ近年「エウトン」(古ノ天文学者ノ名・千七百年間ノ人)「ランテン」(千七百五十年間ノ人・天文学者)ノ創始セル窺天鏡(ソソカラス)ニ自家ノ發明ヲ加ヘ一奇鏡ヲ作り月ヲ窺タリシニ山海八更ナリ数万点ノ動物アルヲ見出セリヨリテ我地球ト同体ナル「益々定論セリ此人日本志著述ニモ相掛リ居レトモ兎角ノ数人別異同多ク甚心ヲ苦メ居レリ其外許多ノ著作アレハ此人ノ名題アル者ハ必求御覽可被成候

一 ある人問フ、貴国にも傑出した学者はいるか。

答えていう、「ベルグステイン」という学者が傑出している。我が「アムステルダム」の酒屋の小僧であったが、すぐれた才能の持ち主であることを学者某が知り、熱心にすすめて教育を受けさせたところ、天文・地理学に優れた才能を發揮し、世にまれな大学者となった。今年二十二歳で「アカデミー」(大学校)のホーグレーラール(学頭第一)(教授)の官位を受け、門弟が三千八百人に及んでいる。ちかごろニュートン(エウトン)(天文学者・千七百年間の人)、ランデ(ランテン)(千七百五十年間の人・天文学者)が創った窺天鏡(ソソカラス)(太陽観察用の望遠鏡)に自己の發明を加え、新望遠鏡をつくつて月を見たところ、山や海はもぢるんのこと、数万点の動物が住んでいることを発見した。これにより月も地球と同体であることが定説となった。この人は、日本志の著述にもかかわつたが、ともかく戸数や人口が諸本によって異なるものが多いので、大変苦心している。その他多数の書物があるので、この著書の名のついた書物は必ずおもとめになりご覧になるようお願いする。

一 或問 月中ノ動物トハイカヤウノ物ニ候ヤ

答曰 「ベルグステイン」カ大發明ノ奇鏡ヲ以テ月中見候ニ山谷原野皆歴タトワカリ候中ニ少々ノ異同八年々ニ有之其平地ラシキ処追々縦横ノ筋ニナリ候処多ク有之候ソノ中ニ一処橋ノ如キモノ有之処ヲ多人数往來イタシ候人物ハタケ低ク猿ノ如ク手足ニ毛ハ候様ニ見申候又都府ラシキ所モ有之候

一 ある人問フ、月に住む動物とはどのような物であろうか。

答えていう、「ベルグステイン」が發明した望遠鏡をもつて月面を観察したところ、山谷や原野がみな明らかになつたが、その中には、少々毎年変化するところがある。その平地らしきところを見ると、毎年しだいに縦横の筋が多くなつていくところがある。その中に一ヶ所橋のようなものがあるところを、たくさんの人が往來している。人物は身長が低く、形が猿に似ており、手足に毛が生えているように見える。また都市らしいところもある。

一 或問 諸厄利亜(あんげりあ)ノ「モリソン」ハイカ様ノ人ニ候ヤ

答曰 「モリソン」ハ竜動ノ人ニシテ生得大志有之奇功ヲ建シ「心カケ候テ兄弟共広東ニ至リ濠鏡(マカオ)ニ十六年間留学シ支那文ニ通シ五車韻府ヲ著シ其外周易書經通鑑綱目東華錄西域碑文ヲ翻譯シ支那志日本志蝦夷志ヲ著作仕候但此三志イマタ成ラサル由ニ候

一 ある人問フ、イギリスの「モリソン」とは、どのような人か。

答えていう、「モリソン」はロンドン出身で、幼いころから大志をいだき、特別の功績をたてよつと心掛けて兄弟で広東に渡來し、マカオに十六年間留学し、支那文に通じ、『五車韻府』(漢和辞典)を著し、その他『周易』『書經』『通鑑綱目』『東華錄』『西域碑文』を翻訳し、『支那志』『日本志』『蝦夷志』の著書もある。ただし、この三志は未完であるときいている。



# 田原市博物館 所蔵品から

重要文化財 山本文承筆季路像  
(孔門十哲像の内) 冢田大峯賛

江戸時代後期

絹本着色

縦一〇二・九cm 横三六・九cm

賛の意味は次のとおりです。  
季路は二親に仕え、貧乏なので自分分は野草の実を食べ、親のために米を百里の外から背負って来しました。

文承拜寫

孝行勞負米

孝行勞して米を負う

勇志發鼓瑟

勇志發して瑟を鼓す

聖門禦侮士

聖門侮を禦ぐの士

惜文不勝質

惜むらくは文質に勝たず

冢田虎敬題

季路は剛勇で、孔子の敵を防ぎ退けること、戦に大琴を弾くようでありました。『論語』に「性質が文に勝つときは粗野となり、文が性質に勝つときは史を作る」とあるように、季路はその性質が粗野なため死ぬ場所に恵まれなかったことが惜しまれます。

季路は姓を仲、名を由、字を子路または季路といいますが。孔門十哲の一人です。魯の下の人で、孔子より九歳若く、孔子門人中の年長者の一人。若い時は、野鄙で一本気、武勇を好んで、孔子に「私以上に勇気を好み、役立てようがない」（論語、

公治長編）とからかわれていました。孔子の護衛役として生涯を尽くし、季路が孔子に仕えて以後、孔子の悪口を言う者がいなくなりました（史記、仲尼弟子列伝）。季路の仕返し

が恐いからです。  
画を描いたのは、山本文承。一橋家の家臣で、山本十次郎という名でした。字は義胤、谷文晁の門下生でした。

賛の冢田大峯は父、旭嶺にはじめ学び、あとは独学で励み、自分の信じる道を歩きました。抱負を大きく持ち、寸暇を惜しんで学問に励み、著述をしました。寛政異学の禁があ

ったとき、大峯上書してその間違いを厳しく説き、幕府もそのため禁を弛めることとなった、と言われています。また、六十五歳の時、尾張の藩校明倫堂の督学となり、懇切丁寧な教え方で、講説もつまく、従字する者も多数いました。

この作品は、昭和三十年二月二日に重要文化財に指定された渡辺華山関係資料の附として、同三十二年一月九日に追加指定され、昭和五十三年三月二十四日に歴史資料に指定替されました。

田原市博物館学芸員

磯部奈三子





# 渡辺華山の「自律狂歌草稿」鑑賞(8)

## 三十一、蚊にくわれ

(狂歌)

蚊にくわれ蚤にいぢられまじまじと  
ねやの隙さへつれなかりける

(本歌)

俊恵法師  
夜もすがら物思つふころは明けやらで  
閨のひまさへつれなかりけり  
百人一首・八五

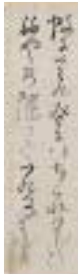
(狂歌の意)

蚊にくわれ蚤にいぢられて、夜もまじまじと眠れせん。寢所の戸の隙間までも私に対して冷たくあることだなあ。

(歌意)

一晩中(つれない人を)思って眠れないで明かすころは、なかなか明るくならない寢所の戸の隙間までも(その人に加えて)私に対して冷たくあることだなあ。

(鑑賞)



平安の昔は、一夫多妻制の妻問い婚が日本における上流社会の結婚の普通の形態であった。しかし、その一夫

多妻制の妻問い婚は広く一般の庶民にまで行き渡っていたと言っただけではない。大勢の妻を養う能力のない庶民は、そのほとんどが一夫一婦の生活を守っていたと言っただけではない。平安の昔は、一夫多妻制の妻問い婚が日本における上流社会の結婚の普通の形態であった。しかし、その一夫多妻制の妻問い婚は広く一般の庶民にまで行き渡っていたと言っただけではない。大勢の妻を養う能力のない庶民は、そのほとんどが一夫一婦の生活を守っていたと言っただけではない。

本歌の作者は、俊恵法師であるが、この歌は法師が恋の歌の題詠を与えられて、女の立場に立つて、訪れてこない恋しい人を持つ女心を詠んだという恋の歌である。孤閨をかこつ女の哀感が色濃く滲んだ妖艶な恋の歌として古来よく知られている。

のである。恋しさに胸を焦がせて、寝付かれないままに閨の中でため息をついたり、恨んでみたり、涙をながしたり、かすかな物音にもさしては恋人の来訪かと耳を傾けたりして、まんじりとませずに時を過ぐす女性の姿が彷彿としてくる。

訪れのなかった女性にとっては、閨の戸の隙間から差し込んでくる朝の光は、むなしく終わった一夜の願いを断ち切るしるしであり、更に今夜へと望みをつなぐ新たな思いの始まりでもある。しかし、この本歌の場合は「閨のひまさへつれなかりけり」で、なかなか夜明けが来ない故の苦しみが一層女心を悩ましてくれているのである。

このような妖艶で微妙な女心ころを詠った本歌に対して、華山の狂歌は、実に即物的であり、世俗的である。本歌の恋の悩ましなどは跡形もなくなって、一晩中蚤や蚊に悩まされることになる庶民の笑いと哀感がストレートに読む者の共感を呼び起こし、顔かせないではおかないのである。華山の着想のよさが光っている。

それにしてもこのころは蚊も蚤もすっかり少なくなったものである。蚊などは夏から秋にかけて今でも時折は出会ふことがなにもあらずであるが、蚤や風などときたら当節はほとんど見つからない。第二次大戦後のしばらくはまだ蚤も風も全盛を誇っていて、狂歌のような風景は決して他人事ではないものがあつたが、D T などという強力な殺虫剤を衣服や頭髮や布団にまで直接振りかけたりなどしたことあつて、それ以後どつと退散し、この頃は人間の閨にもすっかり平安が訪れて、時に何かのきつかけで一匹二匹発見されただけでも大騒ぎされるまでになった。この狂歌を見ると、いつかそんな昔の風景までも浮かんで、なつかしくも可笑しい笑いとパースに誘われてしまつたところがある。

## 三十二、なからへて

(狂歌)

なからへて子にさへ馬鹿に  
さるゝ身はつしと見しよそ今ハ  
こひしき

(本歌)

藤原清輔朝臣  
ながらへばまたこのころさよしのばれむ  
憂しと見し世そ今は恋しき  
百人一首・八四



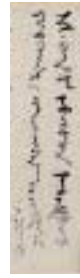
(狂歌の意)

生きながらえて子供にさえ馬鹿にされる身には、つらいと思っていたかつての日は今は恋しく思われることであるよ。

(歌意)

もしもこの世に生きながらえているならば、このつらい現実がまた懐かしく思い出されるであろうか。(なぜならば) つらいと思っていたかつての日は今は恋しく思われることであるから。

(鑑賞)



世界一の長寿国となった日本にとって、今後ますます高齢化の進展が予想される中で、その高齢者の福祉をどう

のように進めるかは、まさに避けて通ることのできない緊急の問題である。

平成の今日、福祉センター・介護施設・福祉施設・老人ホーム・ケアハウス・その他さまざまの関連施設が次々と建設され、福祉や介護の法的整備も諮られ、その内容も見違えるほどに充実してきた。そして、福祉士・介護士・ヘルパーといったそれに携わる人材の育成も着実になされてきて、今や高齢者福祉は時代の花形、一大産業と言えるに等しい花盛りである。しかし、どんなにそうした施設や制度や内容の充実した高齢者福祉の体制が整っても、それが心の通わぬものであったとしたら、当の高齢者たちにとっては、かえって老いの身を生きながらささ生む元になさぬかねない。それ故、現在のみでなく、過去・未来を通じて忘れてはならない高齢者福祉の原点は、老いゆく身に否応なく降りかかってくる人間としての深い寂しさやわびしさや哀しさをやさしく包みサポートできるあたたかな人間愛の心である。それを忘れると、親切という名の下に巨大化する高齢者福祉は次第にその化けの皮がはがれて、営利主義がまかり通る人間のみにくい欲望のみが露呈する修羅場となる。

本歌は、現在のつらい憂悶から抜け出たいという思いを詠った歌であるが、狂歌ではこれを生きながら後子供に馬鹿にされる老人の嘆きに置き換えたもので、古今変わらぬ老人の哀しい一面を巧みに描き出すとともに、前掲のような老人福祉の問題点を逆説的に暴き出しているようにも見えぬ。

華山の親孝行はとりわけ有名である。華山は日頃からこの狂歌のような老人の心境にさせることを恐れ、自分の父母に対しては徹底した孝の精神で貫いた。そのことは、華山の文章や書簡のあちこちに散見され、それが後には修身の教科書に取り上げられるようにさえなった。修身というそれだけでいやな顔をする向きもないではないが、華山のように親を大事にすること、親にあたたかい真心をもって敬い、愛することは、古今東西変わることはない人倫の基本である。

華山が獄中から椿橋山に宛てた書簡の中の短歌

あさ縄二かゝるつき身八数ならず親のなげきをとくよしも可奈

や、華山の妹おもとにあてた書簡の中の一首、

ことしよりいさ孝行乃くらへせんまたあさつけと人八いふとも

などと、この狂歌を並べて読んでみると、この狂歌はまた、ひと味違った狂歌として映ってくるような気がする。

三十三、

(狂歌)

取て食へ八海さへ魚は  
少なきを山の奥にも鹿そなくなる

(本歌)

皇太后宮大夫俊成  
世の中よ道こそなけれ思ひ入る  
山の奥にも鹿ぞ鳴くなる  
百人一首・八三

(狂歌の意)

取って食えば海でさえ魚は少なくなるが、山の奥にも鹿が鳴いているよつである。

(歌意)

この世の中よ。(世の憂さから逃れる) 道はどこにもないのだ。(世の憂さから逃れるもの) 思ひ込んで入ったこの山の奥でも(やはり妻を恋うつのである) 鹿が鹿が鳴いているよつである。

(鑑賞)



二十世紀の人類がやがて直面せざるを得ない大きな問題に、環境問題と食糧問題がある。このうち環境問題は、既に京都議定書も多くの国によって決議され、反対のアメリカは独自の代案を諮って、幾つかの国に再び投げかけて、自らの側への取り込みで打開策を見いだそうとしている。空気の問題やCO2の問題も次第に検討されてきて、少しずつながら改善の方向へと進みつつある。

だが、食料問題では、世界の飢餓人口が何億人もいるという現状はいつに改善される気配もなく、各地で拡がりをみせる民族紛争や宗教紛争によって、逆に飢餓人口は益々増加するという傾向が著しい。このままでは地球的、世界的な飢餓状態が遠からずして訪れてくるのではないかとこのことが心配されている。戦後著しい発展を遂げ、経済的にも裕福になった日本人の多くは、そうした世界の現状など知らぬ気で、バブル崩壊後日ごとに悪化しつつづけている国内の深刻な先行き不安をよそに、国内には物があふれ、さまざま食べ物で満ちている。そして、飽食の習慣は依然として改まる風もなく、食べ残し、食べ散らかして残飯の山を生んでいる。

このことは他国から見れば、なんとも驚くべきことである。しかし、これとても地球的な危機が近づくようになれば、少しは自らの身を振り返り、愕然とする時が来るに相違あるまい。自然の大きな鉄槌が下る前に、日本人の一人ひとりが気がついて、襟を正さねばならぬ問題のようである。

この狂歌の書かれた華山の時代は、天保の大飢饉があり、田原藩とて決して安穩としておられる状況ではなかった。ただ、餓死者が出たり、一揆が起ったりした多くの他の藩に比べ、報民倉の建設など華山らの事前の尽力によって、一人の餓死者も出ることなく、天保の飢饉を乗り切って、幕府から凶荒救済の褒詞をもらうことができた。華山みずからも病中であって立てない状況であったが、『凶荒心得書』を草して、用人真木重郎兵衛定前に総指揮を依頼し、飢饉の窮状を脱するために心を砕いたことは、幾つかの書簡や藩日記の記録などによっても知ることができぬ。

そうした華山であったからこそ、俊成の本歌の「山の奥にも鹿ぞ鳴くなる」とくれば、食料となる鹿のことが気になるなどして、この食料問題対処法のような狂歌

が生まれてきたのかもしれない。海が駄目なら、次は山があるぞといっているように、納得の笑みがこぼれてくる。深刻な食料問題も明るく笑い飛ばしてしまうところに、狂歌の魅力もあるというものである。

三十四、夕酒の

(狂歌)

夕酒の肴もとられぬ釣竿  
のつきにたえぬ八なミたなりける

(本歌)

道因法師

思いわびさてもいのちはあるものを  
憂きにたへぬは涙なりけり

百人一首・八二

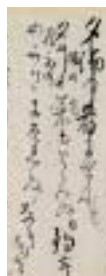
(狂歌の意)

夕方の酒の肴もとることのできない釣竿の  
つらさに堪えきれず落ちるのは涙であるよ。

(歌意)

(つれない人を) 思い嘆いて、そんなふうにして(過)して(いても、生き長らえているものなのに、つらさにこらえきれず)落ちるのは(涙であるよ)。

(鑑賞)



喜怒哀楽の人生には、誰にも感傷的だと言っただけでは済まされない、人知れず泣けてならぬ時があるものである。どんな強がりや負けず嫌いの人の頭の中にも、寂寥のこだまが響く部分があり、それがあってこそ人は人間的ということができないのではない。

この本歌は、一説には恋の歌とる説があり、他にはこの世の憂さを迷懐したものだとする説もある。そのどちらであるにせよ、人としての苦悩や哀しみを背負って生きている人の涙は、人間にとっては生きていくために欠くことのできぬカタルシスの手段である。涙を流すことによって、悩みや哀しみの心が洗い流されて、新

たに生きていく力も生まれ来て来るといふものである。本歌には、そうした人間の姿がみごとに歌い上げられている。

これに対し、狂歌にあつては、その涙は実に現実的であり、庶民的である。タベの酒の肴にする魚の釣れない釣り人にとっては、必ずしも涙を流さねばならないものでもあるまいが、それを大げさに誇張し、戯画化することによって、この狂歌の面白さ、哀感が拡がってくるのである。

本歌の「涙なりけり」が、狂歌では「なみたなりける」となっているが、ここは文法的には、係り結びにはならないので、「けり」であるべきである。華山の記憶違いによる文法的ミスである。

三十五、居続けに

(狂歌)

居続けに財布の底をはたひて八  
たゞ有明の月そのこれる

(本歌)

後徳大寺左大臣  
ほととぎす鳴きつる方をながむれば  
ただ有明の月ぞ残れる

百人一首・八一

(狂歌の意)

居続けする借金取りに財布の底をはたいて金を払った後はただ明け方の月が残っているばかりである。

(歌意)

ほととぎすが鳴いたので、その方をながめやると、(もつ)ほととぎすの姿は見えず、ただ明け方の月が残っているばかりである。

(鑑賞)



本歌の主題は、ほととぎすの初音を聞いた後の美しい余韻のような秀逸な雰囲気である。歌の中心はあくまでもほととぎすにある。このほととぎすは、古代の貴人たちにとっては、桜の花などにも並べられるほどの風雅の素材の一つである。桜の花が春の代表的な素材とするならば、

このほととぎすは夏の風雅の代表的なものと言っていいであろう。貴人らは、人先んじてこれを求め、時には遠出や徹夜までして、これを素材に和歌をつくることを競ったのである。

本歌の場合はず「ほととぎす鳴きつる方をながむれば」と上の句で聴覚的世界を提示し、それを下の句「ただ有明の月ぞ残れる」と視覚的世界へ転換させて、一首にすばらしい余韻を漂わせることに成功している。

これに対して、狂歌はそのほととぎすを消し、下の句の「ただ有明の月ぞ残れる」を本歌取りして、借金取りに責められている庶民の姿としたところに手柄がある。

「居続」というのは、借金を取り立てに来た者が、「借金を払ってくれるまでは、何時までもここを動きません」などといって、何時までも居続けるのを言う言葉である。その「居続」に対して、「ほれ、このとおりだ」と財布の底をはたいて示すのである。しかし、「居続」する借金取りの方もさすがである。容易なことでは、そうですか「など」といって引き下がれる訳はない。夜中を過ぎ、「ただ有明の月ぞ残れる」の頃になつても、執拗に待ちつづけるところは半端ではない。この分では、朝の光が差し込むまで、両者の攻防は続くのである。

研究会員 山田哲夫





善雄寺・谷中墓所の墓参と北斎展

平成十七年度華山史学研究会視察研修

研究会員 加藤克己

平成十七年度の華山・史学研究会の視察研修は、十一月十九・二十日の日程で行われた。華山ゆかりの人物のお墓参りと、東京国立博物館で開催中の北斎展を観覧する目的で、行き先は東京と決定された。

豊橋駅新幹線改札口前に集合し、新幹線で一路東京へと向かった。最初の目的地である小石川の善雄寺へ行くにはいろいろな行き方があるが、私たちは東京駅から地下鉄丸の内線に乗り、後楽園駅で降りた。都合によりここで合流する会員もあり、参加者が全員そろった。

時計を見ると、十一時を少し回ったところであった。お昼には少し早いですが、これからの日程を考えると、ここで昼食をとる方がよいということので、早めの昼食をとった後、後楽園駅から北へ歩き、善雄寺へ向かった。

善雄寺には渡辺家および福田半香の墓がある。渡辺家の墓所には、華山の先祖（華山は七代目にあたるが）の渡辺家初代からの当主およびその夫人、華山の弟妹、長男、長女などが葬られている。華山の父の墓と断定できるものがないが、判読不

能の墓があり、それが華山の父の墓かと思われる。華山の墓は田原にあるので、そこにはない。



私たちが訪れた時、住職は不在であった。墓参りの後で、住職夫人と歓談した。私たちが訪れたことをたいへん喜ばれて、帰りには、寺を紹介した冊子『善雄寺史』を私たち全員に一冊ずつくださった。

善雄寺をあとにして後楽園駅へ戻り、地下鉄大江戸線で上野御徒町駅へ出て、JR御徒町駅から山手線に乗り、日暮里まで行った。



日暮里駅を出ると、南側に谷中墓地が広がっている。谷中墓地は、明治七（一八七四）年、政府が天王寺および寛永寺より上地させて開いた共同墓地で、敷地面積三万坪という驚くべき広さである。ここには、明治以降の日本を作ってきた、有名無名の人々が眠っている（森まゆみ編著『谷中墓地掃苔録』）。

「この一画に渡辺小華の墓がある。これにお参りするのが目的で、ここへ来たのである。小華の墓に参った後、ついでに他の有名な人の墓を探して参った。澤田正二郎、中村正直、長谷川一夫、牧野富太郎、福地源一郎らの墓を回った。他にも徳川慶喜その他、有名な人の墓があるが、時間がなくてとても回りきれない。

この墓地はあまりに広いので、知っている人に案内してもらわないと迷ってしまう。事前に下調べをした、博物館の鈴木利昌さんの案内で、効率よく回る事ができた。

十一月半ばとあって、日暮れが早い。もうじき日が沈むところである。十月までは気温が高くて、気象庁も暖冬を予想していたのに、十一月になったらたいへん冷え込んでしまった。この日も風が強く、空気は冷たかった。予備にと思ってセーターを一枚余分に持って行って大正解であった。

日暮里駅へ戻り、JRで上野へ出た。上野駅の近くのホテルに宿をとっていた。宿へ入って、研究会会長の持っていた万歩計を見ると、約一万三千歩であった。最高齢八十九歳の尾川さんをはじめ、参加者全員完歩したのであった。

夜は、近くの食堂で食事をしながら、尾川さんの戦時中の体験談に聞き入った。

翌二十日は、上野の東京国立博物館の開館時刻



九時三十分になると同時に入館し、開催中の「北斎展」を見学した。

葛飾北斎は、江戸時代後期、華山と同時期に活躍した浮世絵師で、その作品は早くからヨーロッパに渡り、印象派の画家たちに大きな影響を与えた。一九九九年、アメリカの「ライフ」誌が行な

ったアンケート「この千年で最も偉大な業績を残した世界の百人」にただ一人選ばれた日本人だという「北斎展」パンフレット。

この展覧会では、二十歳のデビュー作から、九十歳の年齢が記された肉筆画まで、七十年にわたる北斎の作品を六つの時期に分けて展示し、その創造の軌跡をたどっている。出品総数は約五百点、大英博物館、ボストン美術館、メトロポリタン美術館など第一級の美術館や個人の協力により、北斎のイメージを新たにする多彩な作品を展示している。

その後は自由行動とし、会員各自それぞれ好きな美術館を見学した。東京国立博物館表慶館「伊万里、京焼」、国立科学博物館「パール展」、東京都美術館「プーシキン美術館展」、国立西洋美術館「キアロスクーロ」、出光美術館「平安の仮名鎌倉の仮名」など魅力的な美術展がたいへん多く催されていた。





各地の博物館を訪ねて  
「九州国立博物館」

福岡県太宰府市石坂四 七二  
(〇九二) 九一八 二八〇七  
交通 福岡(天神) 駅から二日市  
駅で太宰府線に乗り換え、太宰府駅  
下車、徒歩十五分



九州国立博物館 昨秋を賑わす話題となった国内四館目の国立博物館は、他の東京、京都、奈良の三館に次いで開館いたしました。しかし、この間百年。岡倉天心が九州にも国立博物館を・・・と唱えて百年の時を経て、平成十七年、念願のオープンとなったのです。

九州国立博物館は立地条件からアジアを意識した展示構成がされています。黒の壁面で、落ち着いた空間のなか、最新の展示方法で見学できます。また、年に何回か、特別展も行われています。

立地はというと、建設された場所は菅原道真が流された太宰府天満宮の隣になります。太宰府駅前で降り、にぎやかな商店街のなかを通り天満宮の横を通り過ぎると、博物館へつながる長いエレベーターと長い歩く歩道が待っています。そして、視界が開けると、そこにはかまぼこ型の巨大なガラス張りの美しい博物館が現れます。右手におしゃれなレストランがあり、そのまま通り過ぎると

博物館の入り口に到着です。

私が特にいいなと思ったのは、「あじっば」という子供たちが遊べる広場でした。「アジアのはらっば」をイメージして「あじっば」と名づけたそうです。実際にさわってみたり、体験型のスペースになっていました。大人でも楽しい場所になっていました。職員がアジア諸国に行き、現地の服やおもちゃ、飾り物などを購入し、いままでにない子供たちにも楽しんでもらえる博物館作りを目指したそうです。

また、博物館の中の空間、ドームの天井を見ると、木材で屋根が覆わ

れていて、天然素材を利用した、環境を考えた建物にもなっています。

ミュージアムショップも日本、アジアのおもちゃなどが販売され、楽しい空間になっていました。

九州国立博物館のホームページをご覧ください、さまざまな情報を手に入れることができますので、参考にしてください。その中の収蔵品ギャラリーには、渡辺華山筆「ヒボクラテス像」が掲載されています。

田原市博物館学芸員

磯部奈三子





田原市博物館からご案内

春の企画展

受け継がれる機巧からくりの技術  
愛知の匠の系譜を今に甦かえらせる  
からくり人形師 玉屋庄兵衛の世界展

～ 伝統と継承の技のすべて～  
会 期 / 四月二十八日(金) ～ 五月二十八日(日)  
休館日 / 毎月曜日  
観覧料 / 一般 七〇〇円(五六〇円)

( ) 内は二十名以上の団体の料金  
小・中学生以下は無料

主催 / 田原市博物館・財団法人華山会・NHK中部ブレイ  
ンズ・中日新聞社

昨年の愛・地球博では、日本の最先端技術の一つとしてロボットが数多く活躍していました。産業立県である愛知県のパビリオンでは、ロボット・ものづくりの原点の象徴として巨大モニュメントにからくりが用いられました。玉屋庄兵衛は京のからくり人形師、庄兵衛が享保19年(1734)に名古屋の玉屋町に移り住んだことにはじまります。

田原市では、江戸時代から続く伝統と歴史ある田原祭を開催し、本町・新町・萱町の三町には華麗な名古屋型からくり山車が保存されています。本町の神功皇后と武内宿禰は六代目玉屋庄兵衛が明治29年に作り、新町の唐子人形は六代目玉屋庄兵衛の弟子内藤金次郎作、萱町の幣振り人形も昭和63年に玉屋庄兵衛の手により復元されました。人をかたどった木の身体に着物を着せ、顔を描く、その手・足には木でできた歯車が仕掛けられていく。玉屋庄兵

衛の手から生まれた人形たちは皆、それぞれの人格を持って生きているようです。江戸時代に花開き庶民に愛された「からくり人形」の伝統を継承し修復や復元、創作活動を続けてきた玉屋庄兵衛の世界を一堂に展覧いたします。



展示内容 / 山車からくり人形 歴代玉屋庄兵衛の作品 犬山祭浦島人形・小牧秋葉祭・恵比寿・大黒天など

座敷からくり人形 こま廻し人形・茶運人形など  
製作工房を再現 九代目の工房を会場に再現 製作道具のほか、鯨のひげなどの珍しい材料も展示  
九代 玉屋庄兵衛によるからくり実演 / 茶運人形・弓曳童子人形・からす天狗

4月30日(日)・5月6日(土)・5月7日(日)・5月14日(日)・5月21日(日) 午前11時～午後1時・2時～3時

からくり人形は、温度・湿度などの影響を受けやすいため、その日の状況によって実演を見合わせる場合がございます。予めご了承ください。

今回の企画展の図録「からくり人形師 玉屋庄兵衛の世界展～伝統と継承の技のすべて～」を販売しております。期間中のみ限定販売です。この機会にぜひお買い求めください。

オールカラー、無線綴じ、102ページ、  
価格1,800円(税込)

催しもののご案内

五月五日 午前九時三十分から  
「こどもの日企画」鑑を着てみよう」

親子・一般も可、定員60人  
四月一日から電話にて先着順受付

田原市渥美郷土資料館春の企画展

「田原市博物館コレクション展 歴史と美術」

渡辺華山筆「客坐掌記」(重要美術品)・  
「参海雜志」(複製)ほか

白井烟巖筆「峽壁飛泉」(第4回日展入選・1948年)ほか  
ほかに山本栞谷・渡辺小華・林武・三岸節子

浮世絵 歌麿・写楽・北斎・広重・豊国・国芳・晩斎・小林清親(芝村義邦コレクション)

陶磁器 古伊万里・人間国宝作家(加藤卓男・塚本快示)作品など

田原藩関係資料ほか  
火なわ式鉄砲(國友)  
会期 / 四月二十二日(土) ～ 五月二十一日(日)



休館日 / 毎週月曜日  
観覧料 / 無料

展示解説 / 4月29日 午前十一時 田原市博物館学芸員

財団法人華山会  
田原市博物館 から  
ご案内

企画展のご案内

四月二十八日(金)～五月二十八日(日)

春の企画展「からくり人形師 玉屋庄兵衛の世界展」 (企画展示室)

同時開催 谷文晁と渡辺華山 (特別展示室)

九月十五日(金)～十月二十二日(日)

秋の企画展「福田半香展」 (企画展示室)

同時開催 渡辺華山の弟子たち (特別展示室)

平常展のご案内

三月二十三日(木)～四月二十三日(日)

渡辺華山の書と絵画の師 (特別展示室)

華椿系の花鳥画 (企画展示室1)

田原の歴史～田原藩 (企画展示室2)

六月二日(金)～七月二十三日(日)

渡辺華山の先達～文人画家 (特別展示室)

近代の美術 収蔵品から (企画展示室1)

コレクション選 (企画展示室2)

白井烟嵐筆 秋林 昭和四年 第一〇回常展入選



七月二十七日(木)～九月十日(日)

華山とその時代～蘭学の友 (特別展示室)

芝村義邦コレクション～浮世絵に描かれた人びと (企画展示室1)

田原の歴史～遺跡出土の骨・貝からみる渥美半島の自然 (企画展示室2)



合美人里遊世長清

常設展示室では渡辺華山の生涯を紹介しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています。

赤羽根文化会館展示室でも所蔵品を展示しています。

観覧料

企画展

一般 春 七〇〇円(五六〇円)

秋 六〇〇円(四八〇円)

小学生 無料

平常展

一般 二二〇円(一六〇円)

小学生 一〇〇円(八〇円)

(一)内は二十名以上の団体の料金

毎週月曜日は休館 月曜日が祝日の場合は翌日。展示替臨時休館あり。

渥美郷土資料館(渥美支所隣)でも展示しています。観覧料無料

四月二十二日(土)～五月二十一日(日)

企画展田原市博物館コレクション展 (企画展示室)

(詳細は十五ページにあり)

田原市博物館友の会会員募集中

入会申込書に十八年度分会費千円を添えてお申し込みください。

特典

博物館への無料入館  
展覧会・催し物のお知らせ  
見学会に参加できます。

博物館日より(年三回)・華山会報を郵送します。

(財)華山会から

華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室

毎月第四土曜日午後研究会

視察研修(年一回)に参加できます。

華山会報 第十六号

平成一八年四月二一日発行

編集発行 財団法人華山会

理事長 白井孝市

事務局長 光浦貞佳

千四四一―二四二

愛知県田原市田原町巴江二二の一

TEL 五三二・二二一・一七

FAX 五三二・二二一・一七

編集・協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 渡辺巨祥

林 和彦 山田哲夫

別所興一 林 哲志

小川金一 柴田雅芳

加藤克己 中神昌秀

増山禎之

華山会報ご希望の方は華山会館・

田原市博物館にお申し出ください。

次回発行予定 平成一八年一〇月二一日